文末の「カラ」と「カラダ」の意味用法
―「ノダ」の用法との比較を通して―

許　　夏　玲

0．はじめに

従来同じ理由を表わす文末の「カラ」[1]と「カラダ」は一見言い換えが可能であるかのように見えるが[2]、言い換えが不可能である場合が多いと言われる[3]。例えば、(1)、(2) の「カラ」は「カラダ」とは置き換えられない。

（1）　長子「大丈夫よ。今にお給料も貰えるようになるし、私だって働くし……。そうしたら、部屋も借りられる。お父さんやお母さんに心配はかけない{から/*からだ}」[4]

節子「心配するわよ。夫婦、親子別れ分かれで……。本間さんからはなんの連絡もないし……。日向子だってどうしてるんだか……」

『渡る世間は鬼ばかり』

（2）　純子「ええ。でも心配しないで。ここは私が引き受けるから」

伸子「でも――」

純子「いい{から/*からだ}。社長は大きく構えていなさいよ」

『女社長に乾杯』

しかし、以下のように、（1）と（2）の「カラ」は「ノ」（「ノダ」）と置き換えられる。

（1'）「大丈夫よ。今にお給料も貰えるようになるし、私だって働くし……。そうしたら、部屋も借りられる。お父さんやお母さんに心配はかけない{から/の}」

（2'）「いい{から/の}。社長は大きく構えていなさいよ」

このように、文末の「カラ」と「カラダ」の使用には違いが見られる。一方、文末の「カラ」の「ノダ」への置き換えが可能であることから見ると、両者には似たような意味・用法があると考えられる。

本稿では、「ノダ」の用法との比較を通して、文末の「カラ」と「カラダ」の意味・用法の分析を試みる。

１．文末の「カラ」と「カラダ」について

文末の「カラ」と「カラダ」の相違について論じる前に、先ずそれぞれの意味・用法を見ていきたい。

1.1　文末の「カラ」の意味・用法

接続助詞「カラ」は主節で述べられている事柄の原因・理由を表わす従属節を構成する。文末の「カラ」もその従属節の一部としての意味・用法を引き継ぎ、原因・理由を表わす。次の（３）はその一例である。

（３）　英作「(調理場に向かって大声で）ラーメンッ」
　　キミ「またラーメンですか？」
　　英作「一番安くてうまいからね」　　『渡る世間は鬼ばかり』

（３）では、話し手が文脈から「どうしてまたラーメンにするのか」という疑問を設定し、「カラ」によってその理由と判断される「一番安くてうまい」を提示すると考える。

しかし、「カラ」が話し言葉の文末に現われる場合、原因・理由を表わすとは考えにくいものもある。文末の「カラ」には「理由」に近いものもあるし、単に相手の行動に必要な前提情報を提示するものもある。本稿ではこのような文末の「カラ」を「相手の行動や心理的変化を導く情報の提示」の「カラ」と呼ぶ。このような「カラ」は、その文脈と提示された情報の間の因果関係が弱い。話し手が相手の行動や心理的変化を導く情報を提示する際、それが「理由」を表わす度合から見ると、次のような例文は（４）→（５）→（６）の順に「理由」から離れていくように思われる。

（４）　良雄「(顔を出し）お兄ちゃん」
　　耕一「うん？」
　　良雄「近所から苦情が来るから」
　　耕一「なんで？」
　　良雄「九時前からダンダンガンガン」　　『ふぞろいII』

（５）　長子「大丈夫よ。今にお給料も貰えるようになるし、私だって働くし……。そしたら、部屋も借りられる。お父さんやお母さんに心配はかけないから」
　　節子「心配するわよ。夫婦、親子別れ分かれで……。本間さんからはなんの連絡もないし……。日向子だってどうしてるんだか……」
　　『渡る世間は鬼ばかり』

(6)　小春「買物のついでにおやつ買って来たよ。あんたの好きな今川焼、ここ置いとくからね」　　『男はつらいよ』

（４）のような文において、話し手が相手に率直に「作業をやめてよ」と言うと、相手

に押し付けがましい感じを持たせてしまうことになる。そこで、話し手はこの点に配慮し、相手が納得できそうな情報を理由として提示し、控えめに説得しようとする。（5）では、話し手が相手に直接「大丈夫よ」あるいは「安心して」と言っただけでは、相手は納得してくれないだろう。そこで、話し手はいろいろ情報を取り上げて「お父さんやお母さんに心配はかけない」という理由を提示し、相手の心的状態（心配していること）を変えようとする。

一方、（6）の場合、話し手は「カラ」によって相手の行動（いつ食べてもいいこと）に必要な前提情報を提示する。従って、（6）の「カラ」は（4）、（5）の「カラ」より「理由提示」のニュアンスが弱い。

1.2 「カラダ」の意味・用法

「カラダ」に関して、田野村（1990）は、「YのはXカラダ」は、XとYが因果関係にあることを積極的に表現すると述べている。また、白川（1994）は、「Yのは」の部分が話し手と聞き手が文脈から理解できる場合には、言語化されないと言う。例えば、次の（7）、（8）を見てみよう。

（7） 太郎が瞑想を破られたのは、その時、下に聞き覚えのある声がしたからだった。　　『太郎物語』

（8） 大畑は目をむいた。「何を言うか！私は本気だぞ！」
伸子「ですが、私はお茶くみ専門の――」
大畑「それは今までの経営者に人を見る目がなかったからだ。しかし私の目は確かだ！君は社長になるべき器なのだ！」　　『女社長に乾杯』

（7）において、「YのはXからだった」の「からだった」は「からだ」の過去形であり、話し手が「その時、下に聞き覚えのある声がした」（X）を「太郎が瞑想を破られた」（Y）の理由と断定している。（8）の場合、「今までお茶くみ専門の仕事をさせられた（Y）のは」の部分が文脈から推測できるため、言語化されておらず、その理由と断定したもの「今までの経営者に人を見る目がなかった」（X）のみ提示されると考える。

1.3 文末の「カラ」と「カラダ」の相違

文末の「カラ」と「カラダ」の意味・用法は、原因・理由を表わすという点では共通している。例えば、次の（9）、（10）の「カラダ」は同じ原因・理由を表わす文末の「カラ」と置き換えられる。

（9） さくら「うん、どういう人」
寅「俺もいいたい、でもその人の名前を言ったら、お前達はアッと驚くかも

しれないが」

寅「オレはどんなことがあっても言えない」

さくら「どうして？」

寅「その人に迷惑がかかる{からだ/から}。どうか、これだけは勘弁してくれ。」　『男はつらいよ』

(10)　社長「すっかりだんご屋のおかみさんだねえ、さくらさんも」

さくら「えへへ、そうかしら」

社長「あんたが娘の頃は、きっとこの娘は玉の輿に乗って、いいとこの奥様になるに違いないと思ってたけどね」

つね「あんたがしっかり儲けて博さんに高い月給払ってくんない{からだ/から}よ」　『男はつらいよ』

上記の例文において、「オレが言えない（のは）」（９）、「さくらが玉の輿に乗れなかった（のは）」（10）という因果関係の結果部分が文脈からわかるため、言語化されないと考えられる。

しかし、「カラダ」の文末の「カラ」への置き換えが可能である場合が多いのに対し、逆に文末の「カラ」の「カラダ」への置き換えは不可能である場合が多い。例えば、次の（11）～（13）を見てみよう。

(11)　さくら「そうね、お兄ちゃんはああ見えても気持が優しいもんね」

竜「そこだよ、そこ、優しいんだよ、寅って奴は」

社長「全くだなア、あんないい奴見たことねえ{から/*からだ}な」

『男はつらいよ』

(12)　さくら「お兄ちゃん」

さくら「何してるの、こんなところで」

寅「考え事よ」

さくら「へえ、お兄ちゃんでも考えることあるの」

寅「そりゃあるさ、インテリと交際している{から/*からだ}な今は」

『男はつらいよ』

(13)　良雄「(顔を出し）お兄ちゃん」

耕一「うん？」

良雄「近所から苦情が来る{から/*からだ}」

耕一「なんで？」

良雄「九時からダンダンガンガン」　『ふぞろいII』

（11）では、話し手は自分も相手の言ったことに同感する理由（「あんないい奴見たことねえ」）を挙げて説明していると考えられる。（12）では、話し手は自分にも考え事

がある理由（「今インテリと交際している」）を挙げて説明していると考えられる。(11)、(12）のように、「Yのは」という因果関係の結果部分（「自分も同感すること」((11))、「自分にも考え事あること」((12)）は「カラダ」によって提示された原因・理由の部分と因果関係が弱いため、「カラダ」は使えないと考える。先ず（11）の例文を分析すると、「私は寅のことについて『あんないい奴見たことない』と思っている」→「皆も『寅は優しい』と言っているのを聞いて、実は私の考えと同じであることがわかって」→「私も同感を示す」という話し手の心理的な過程を辿れば、「あんないい奴見たことない」と「私も同感だ」の間の因果関係の繋がりが弱いことがわかる。

（12）の場合、「今はインテリと交際している」→「知的なインテリと付き合うと、いろいろ考えさせることがある」→「当然私にも考え事がある」という風に見ると、「今はインテリと交際している」と「私にも考え事がある」の間に因果関係があることはあるが、弱いことがわかる。(11)、(12）のような因果関係が弱い場合は、積極的に因果関係を表わす「カラダ」は使えないのである。

（13）の文末の「カラ」は話し手が相手の行動や心理的変化を導く情報を提示するときに使われる。このような「カラ」は、その文脈と提示された情報の間の因果関係が弱い。(13）では、話し手が直接「作業をやめてよ」と言っただけでは、相手は納得してくれないだろう。そこで、話し手はある情報を取り上げて「近所から苦情が来る」という理由を提示し、相手の行動をやめさせようとする。(13）のような相手の行動や心理的変化を導く情報を提示する「カラ」も因果関係が弱いため、「カラダ」と置き換えられない。

白川（1994）は、終助詞「サ」「ヨ」は「ダ」と同様に断定の意味を含むため、「カラダ」に準じた扱いをすると言う。それの例として次のものを挙げている。

（14）　律子：どうして、そんな嫌らしいこというのかしら？
　　堀：事実だからさ。

（15）　良介：口から出任せ言うたんか？
　　桃子：そんなことないわよ。
　　良介：じゃ、どうして忘れていいなんて言うんや。
　　桃子：おっちゃんが、料理も喉を通らんって顔をしてるからよ。
（白川1994：64）

また、白川は、次のような日本語教科書の「カラ」の例文について、「カラ」はおかしく、「カラダ」と言わなければどうにも座りが悪いと指摘している。

（16）　どうして会社を休みましたか。
　　・・・熱がありましたから。　　（白川1994：67）

もし上記の例文の「カラ」を「カラダ」に変えると、例（17）のようになる。

（17）　どうして会社を休みましたか。

・・・熱があったからです。

（17）の「からです」は「からだ」の丁寧体であり、話し手が会社を休む理由は「熱があった」と断定している。上記の例文において、筆者は白川の見解と違い、一見「カラダ」を使っても良さそうに見えるが、もし相手が上司や親しくない仲間である場合、話し手が（17）のように相手の質問に対し「カラダ」を使うと、「熱があったから、当然会社を休んだ」という感じを相手に与えられ、横柄な態度を相手に感じさせてしまうことも考えられる。筆者はもし相手が上司や親しくない仲間である場合、「カラダ」よりむしろ（16）のように「カラ」を使う方が丁寧であると考える。

2.「ノダ」と「カラダ」について

2.1 「ノダ」の意味・用法

これまで「のだ」の意味用法についての研究は数多くあるが、そのうち、Alfonso（1974）、久野（1973）、寺村（1984）、益岡（1991）などは、「のだ」は基本的に「説明」を表わすものだとしている。それに対し、田野村（1990）は、「のだ」の基本的意味・機能はことがらの「背後の事情」を表わすこととしている。（18）はその例である。

（18）　きょうは休みます。体調が悪いんです。　　（田野村1990：5）

国広（1992）も田野村と同じような解釈を持ち、ある現状を認知するという主体的行動を行ない、それと関連があると"主観的に判定される" 既定命題[5] を「のだ」の前に提示するとしている。そこで、認知されるはずの現状が何であるかはっきりしない場合は「のだ」文は使えないことになる。国広（1992：23）によれば、仮に筆者（国広）が前に話者（学生）に何か仕事を頼んでいて、催促の手紙でも出していたという現状がなければ、その話者は「先生お元気ですか。私はとても忙しいのです（国広1992：23）」という風には言えないと言う。

更に、国広はこの既定命題も主観的にそう認められるものであることを示唆している。国広（1992：25）によれば、話し手が「母は寂しいんですよ」と言ったとき、母の言動をそばで観察していて、母が寂しい気持ちを抱いていることが既定のこととして主観的に認められたことを示していると言う。

本稿では、上記の「のだ」に関する先行研究をふまえて、「のだ」の前に認知された現状と関連があると話し手が判断する既定命題が来ることが「のだ」の重要な性質であると考える。

2.2 「ノダ」と「カラダ」の相違

「ノダ」と「カラダ」についての研究は、久野（1973）、田野村（1990）、白川（1994）などが挙げられる。久野（1973）では「ノダ」が説明せんとする事象は、先行文として言語化されなくてもよいものであるのに対し、「カラダ」が説明せんとする事象は文として言語化されたものであり、その文がそのままのかたちで「S_1ノハ・・・カラダ」のS_1として用い得るものであると述べられている。たとえば、次のような例を見てみよう。

（19）　礼子「泉はいないわよ」
　　満男「あの，じゃ，今どこに」
　　礼子「妹が佐賀県にいてね，そこに行った」
　　満男「佐賀県？どうしてそんなとこに」
　　礼子「きっと，私と暮らすのが嫌{なんでしょう/だからでしょう}」
　　『男はつらいよ』

（20）　つね「よっこいしょと」
　　竜「どっこいしょと」
　　寅「その立ったり座ったりする時にさ、やれやれだとかどっこいしょってのやめてくれよ、爺むさい、婆むさい」
　　竜「お前みたいな体の丈夫な奴にはな、年取るとどんなにつらいかわからねえ{んだ/?? からだ}」　　『男はつらいよ』

（19）においては、話し手がある事柄の原因や理由を話し手が推量して表現している。話し手が相手の質問「どうしてそんなとこに行ったの」に対し「ンダ」（「ノダ」）を使って、それと関連がある事柄を推量していると考えられる。（19）のような場合、話し手が説明しようとする事象は先行文「そんなとこに行った」として言語化されているため、「そんなとこに行ったのはきっと、私と暮らすのが嫌だからでしょう」という風に「カラダ」を使うことができる。（20）においては、話し手が寅の言ったことに対し、それと関連があると判断する既定命題を「ンダ」（「ノダ」）の前に提示していると考えられる。しかし、「S_1ノハ」という部分が文脈で明らかでないため、「カラダ」は使えない。

しかし、久野説に対し、白川（1994）は「S_1ノハ」という部分が文脈から了解できる場合には、一々言語化する必要はなく、「S_2カラダ」のみで済ますことができると指摘している。その例として次のようなものは挙げられている。

（21）　則子：ほんとかしらっていってるの、お母さんは（と笑いの声でいう）
　　謙作：ほんとさ。そりゃもう日本にいたら想像もつかない土地なんだ。雨がふりだしたら、とめどがない。国土の三分の二を水がおおって、海と川の区別もつかなくなっちまうっていうんだから、すごいよ。それ

を見越して道路が高くなってる。だから、洪水になると、みんな道路へ逃げるんだ。あとは水だらけだ。

則子：久しぶりだわ、ダッカの話。

謙作：お前たちが本気で聞こうとしないからだよ。　（白川1994：65）

上記の例文において、「カラダ」の「S_1ノハ」（「（自分が）ダッカの話を久しくしなかった」コト）という部分が文脈から明らかであるため、わざわざ言わないということである。

また、「ノダ」と「カラダ」の違いについて、田野村（1990）では「ノダ」は基本的に背後の事情を表現するのに対し、「カラダ」は「AノハBカラダ」のAとBが因果関係にあることを積極的に表現すると述べられている。更に、「ノダ」を説明の表現として使う際、「ノダ」の前に来る事柄がまだ聞き手に知られていないことが必要であるのに対し、「カラダ」にはそのような制約はないと言う。例えば、（22）の文においては、気分が悪いということは話し手の内面的な事象であり、聞き手は告げられるまでそれに関して無知でいても無理はないため、このような場合には「ンダ」（「ノダ」）も「カラダ」も使えると言う。

（22）　どうして休むの？―― 気分が{悪いんです／悪いからです}。

（田野村1990：36）

（23）　梅「びっくりしちゃったよ」

竜造「どうして？」

梅「寅さんに逢ったんだよ」

つね「えー？」

竜造「寅に・・・・・・何処で」　　『男はつらいよ』

(23)において、「んだ」(「ノダ」)の前に提示された事柄は聞き手の知らない事柄である。

しかし、（24）のような文においては、聞き手が未成年であることは聞き手自身がよく知っているはずの事柄であるため、「カラダ」は使えるが、「ンダ」（「ノダ」）は使えない。

（24）　どうしてわたしではだめなんですか？―― あなたは{？未成年なんです／未成年だからです}。　（田野村1990：38）

上記の例文において、「あなたは未成年なんです」という風には言えないが、「あなたは未成年なんですよ」のように「ンダ」に「ヨ」を付けると、言える。「ンダ」の前に提示されたことが聞き手の知っていることにも関わらず、「ンダ」が使えるのはなぜだろうか。これについて、筆者は以下のように考える。「ヨ」は、ある情報について、聞き手が知らないだろうと話し手が判断し、それについて聞き手に伝える必要があると思うときに使われる。相手は自分が未成年であることを知っていても当然であるが、まだ自分が未成年であることを十分に認識していない、或いは未成年の人がやってはいけ

ないことをやってしまった場合、話し手が聞き手の頭の中でまだ十分に認識していないことがあると判断し、それを「ンダヨ」によって聞き手に説明して認識させると考える。

例えば、次の（25）はその例である。

（25）　女将「親子？へーえ、お澄さん、あんた子あったん」
老女「いいえ、おまへん」
寅「嘘だよ、そんなこと嘘だよ！」
寅「どうして名乗ってくんねえんだい、おっ母さん、お澄なんていうのはそんな、仮の名だよ、あんたの本当の名は、菊っていうんだよ」
老女「お菊はんはこの人どす」
寅「え！」　『男はつらいよ』

（25）において、話し手は相手が自分の本名を知っていても当然であるのに、相手が否認していることから見ると、何らかの原因（相手が記憶を失ったことなど）で相手が自分の本名をまだ十分に認識していないため、「ンダヨ」によって相手のまだ十分に認識していないことを伝えていると考える。

以上のように、「ンダ」（「ノダ」）の前には話し手が聞き手のまだ十分に認識していないことを提示する場合がある。聞き手が知っていても当然なことであるが、まだ十分に認識していない場合、あたかも聞き手が知らないかのように「ンダ」（「ノダ」）を用いる。これは田野村で述べられたような「聞き手の知らないこと」と同じ意味で解釈できるだろう。

また、実例の中には次の（24）、（25）のように、話し手が先に何か理由を述べて、それからそれと関連があると判断する事情を相手に提示して説明する例も少なくない。

（24）　悦子「別れたの。いつ」
りん子「三ケ月前。しばらく一人で暮らしてたの」
悦子「やっぱりね。会った時から何かあるんじゃないかなと思ってたよ。」
順吉「うるさい、歌なんか歌うな！」
寅「おじさん、八つ当りはよしな。みっともない」
順吉「あんな情けない男と一緒になるからだ。お前が馬鹿なんだ」
『男はつらいよ』

（25）　寅「ねえちゃん、本が好きかい？」
寅「その本、面白いかい」
礼子「あ・・・いえ、あんまり」
寅「うん、読みつけないからだな。初めは皆、誰でもそうなんだよ。」
『男はつらいよ』

「ノダ」と「カラダ」の相違についてまとめると、説明を表わすという点では「ノダ」と「カラダ」の用法にはかなり似たところがある。「（Aは）Bノダ」は話し手が認知

された現状Aと関連があると判断する事柄Bを提示して説明するときに使われる。一方、「（Aノハ）Bカラダ」は話し手がBがAの理由であることを提示するときに使われる。「カラダ」文においては、「～ノハ」という部分が文脈から了解できる場合には言語化されなくてもよい。また、「ノダ」の前に来る事柄は聞き手の知らないことでなければ、「ノダ」は使えない。「カラダ」にはそのような制約はない。

３．文末の「カラ」と「ノダ」について

１.１節にも述べたように、文末の「カラ」の用法には、原因・理由を表わすものと、相手の行動や心理的変化を導く情報の提示を表わすものがある。これらは「ンダ」（「ノダ」）と置き換えられる場合もある。例えば、次の（26）～（28）を見てみよう。

（26）　太郎「君んちへ連絡とろうと思ったんだけど」
　　藤原「ダメだよ。警察の人が五、六人来てる。それに親爺の会社の人もたくさんいる{から/んだ}」　　『太郎物語』

（27）　伸子「お父ちゃん、外にご飯食べに行こう。私がおごる{から/の}。お母ちゃんは？」　　『女社長に乾杯』

（28）　母「何で急に食べたくなくなったの」
　　太郎「考えたいことがあるんだ。学校へも行かない」
　　母「病気でないんなら、ご飯食べてから、ゆっくり考えなさい。二日でも、三日でも、一週間でも構わない{から/の}。お腹空かしてて、いい考えは浮ばないよ」　　『太郎物語』

（26）の「カラ」は話し手が「どうして家へ連絡しちゃだめなのか」という疑問を想定し、その理由を挙げている。（27）、（28）の「カラ」は話し手が相手に「一緒にご飯を食べに行くこと」（(27)）、「ゆっくり考えること」（(28)）を要請するために、「カラ」によって相手の行動を取るための前提情報を提示していると考える。（26）～（28）の「カラダ」を「ンダ」/「の」（「ノダ」）に入れ換えると、話し手が認知された現状と関連があると判断する既定命題を相手に提示することによって、説明という効果が生じることになる。

しかし、次のような例文の「カラ」は「ンダ」（「ノダ」）とは置き換えられない。

（29）　リリ「バッチリってどういう風によ」
　　寅「うん。続きは明日、な」
　　リリ「いやいや。今、今、もう少し、もう少し……」
　　寅「眠い{から/*んだ}ね、明日又」　　『男はつらいよ』

（30）　寅「ピヤノ！なんでえさくら、ピヤノが欲しいのか？」

さくら「満男に習わせたいの」

寅「はあ.....」

博「満男は男の子{だから/*なんだ}な」　　『男はつらいよ』

(31)　良雄「(顔を出し) お兄ちゃん」

耕一「うん？」

良雄「近所から苦情が来る{から/*んだ}」

耕一「なんで？」

良雄「九時からダンダンガンガン」　　『ふぞろいII』

前にも述べられたように、「ノダ」を説明の表現として使う際、「ノダ」の前に来る事柄がまだ聞き手に知られていないことが必要である。(29) の「ンダ」(「ノダ」) の場合、眠いということは話し手の内面的な事象でり、聞き手が知らない可能性もあるのにも関わらず、一般に確認を求める「ね」とともに使うのはおかしいと考えられる。(30) は、話し手も自分の息子「満男は男の子だ」ということを知っているはずであるため、「ンダ」(「ノダ」) は使えない。(31) では、話し手が「カラ」によって相手に「作業をやめてほしい」ための前提情報を提示していると考える。(31) においては、話し手の認知した現状が何であるかはっきりしないため、「ンダ」(「ノダ」) は使えない。

実例の中には、次の (32) のように、話し手が先に「ノ」(「ノダ」) によって現状と関連する既定命題を提示し、それからその既定命題を提示した理由を「カラ」によって提示する例もあった。

(32)　本坊「この町は、いかがですか？」

「いいところもあるのよ。少なくとも、東京よりはおいしいものあるから。東京だってお金出し放題の人は知らないわよ。(略)」

『太郎物語』

4. まとめ

文末の「カラ」と「カラダ」は原因・理由を表わすという点では共通している。しかし、「カラ」とは違い、「(Aノハ) Bカラダ」のように、「Aノハ」の部分が言語化されなくても、AとBの因果関係が強い場合でなければ、「カラダ」は使えない。それに対し、文末の「カラ」の用法には原因・理由を表わすもの以外、因果関係が弱い相手の行動や心理的変化を導く情報の提示を表わすものもあるため、このような「カラ」は因果関係が強いときに使われる「カラダ」とは置き換えられない。「ノダ」は、事情の説明という点では文末の「カラ」と「カラダ」とかなり似たところがあるが、「ノダ」の前に提示された事柄は聞き手の知らないことでなければならないのに対し、文末の

「カラ」と「カラダ」にはそういう制約はない。また、話し手の認知した現状と関連があると判断する場合に使われる「ノダ」は「カラダ」とは違い、因果関係が弱い「相手の行動や心理的変化を導く情報の提示」の文末の「カラ」との置き換えが可能である場合もある。

注

1)　本稿では倒置、言い淀み、さえぎられによって生じる文末の「カラ」を考察対象から除外する。
2)　「カラ」と「カラダ」に関して、『日本語文型辞典』（1998：89）では「理由を表わす『XからY』を転倒させて『YのはXからだ』の形になったもの」と述べている。
3)　白川（1994）の調査結果によると、収集した例文200例のうち、「カラダ」に言い換えられるものは、35例だったと言う。更に、これは「カラ」で言い切っている理由文の約83％が「カラ」でしか言えないことを示していると言う。
4)　実際には、女性は「からだ」より「からよ」の方がよく使うが、（1）と（2）の例文において「からよ」への置き換えも不可能である。
5)　「既定」とは発話時点に先だって話し手が既に持っていることを指す。

参考文献

伊豆原英子（1993）「『ね』と『よ』再考―『ね』と「よ』のコミュニケーション機能の考察から」『日本語教育』　80号　pp.103－114
大曾美恵子（1986）「誤用分析１『今日はいい天気ですね。』―『はい、そうです。』」『日本語学』VOL.15 No.9　明治書院　pp.91－94
国広哲弥（1992）「『のだ』から『のに』、『ので』へ―『の』の共通性―」『日本語研究と日本語教育』カッケンブッシュ寛子 他編　名古屋大学出版会　pp.17－33
久野 暲（1973）『日本文法研究』大修館書店
白川博之（1995）「理由を表さない『から』」『複文の研究（上）』くろしお出版　pp.189－220
――――（1994）「『カラ』と『カラダ』」『広島大学日本語教育学科紀要』4　広島大学日本語教育学科　pp.63－74
田野村忠温（1990）『現代日本語の文法Ⅰ―「のだ」の意味と用法』和泉選書
陳常好（1987）「終助詞―話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞―」『日本語学』Vol. 6 No. 7　明治書院　pp.93－109
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版
許夏玲（1997）「文末の『カラ』について―本来的用法から派生的用法へ―」『ことばの科学』VOL.10　名古屋大学言語文化研究委員会　pp.73－86
――――（2000）「話し言葉の文末におけるモダリティの表現形式―『接続助詞』『条件形』『第二中止形』『引用助詞』―」名古屋大学大学院文学研究科博士学位論文

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
Alfonso, Anthony（1974）*Japanese Language Patterns* V.2. Sophia University Press.

例文出典

『ふぞろいII』：『ふぞろいの林檎たち（II)』山田太一（1988）大和書房
『渡る世間は鬼ばかり（上)』橋田寿賀子（1996）ラインブックス
『新潮文庫の100冊』（1995）新潮社版
『男はつらいよ』CASTEL/J CJ-ROM V1, 2（1998）日本語教育支援システム研究会